

ヨーロッパ・ツアー現地演奏会評(14)

「N響ヨーロッパ公演2020」の中から、2月24日に行われたロンドン公演について、現地メディアによる演奏会評をご紹介します。

Arcana

Ben Hogwood

今回のロイヤル・フェスティバル・ホールでの演奏会は、現在東京から首席指揮者のパーヴォ・ヤルヴィとともに小規模な演奏旅行を行っているNHK交響楽団の演奏を聴くことができる比較的まれな機会だった。

先週Arcanaに掲載されたインタビューでヤルヴィが語ってくれたように、彼が武満徹の音楽を熟知するようになったのは、NHK交響楽団と彼の管弦楽作品を録音することになったつい最近のことなのだという。そのうちの一作品である《ハウ・スロー・ザ・ウィンド》は、静けさのイメージを我々の前に提示し、非常に描写と色彩に満ちた音楽によってこの演奏会の幕を開いてくれた。

武満の最良の特徴は、彼の音楽の描写的な力である。微妙な、しかし意味に富んだやりかたで、様々な要素をしっかりと把握することができる作曲家だ。雨、大地、空気の3つの要素がひときわ耳を引き、その中でも特に空気の要素はこの興味深い交響詩の中でも特に際立っている。題名が示すように、この楽曲は空気のゆったりとした動きであり、ディテールと愛情にしっかりと注意を向けながら演奏され、サウスバンクから遠く離れた場所からやってきた絵画を描き出していた。ヤルヴィが概説してくれたように、ドビュッシーからの影響がはっきりと見て取れるが、ラヴェルやメシアンからきた要素も見て取れる。しかしながら、武満がこの曲を彩った打楽器の色彩は、完全に彼独自のものであった。

その後、ソル・ガベッタが加わってシューマンの《チェロ協奏曲》が演奏された。この楽曲は彼女が愛してやまない楽曲に違いない。近年この楽曲が器楽協奏曲のレパートリーの中心に組み入れられるようになったことは喜ばしいことだ。第1楽章は、ずっと頭の中に残り続ける執拗な主題に支配されており、劇的な音楽であった。ガベッタが主導権を取っていたが、ヤルヴィと比較的小規模な管弦楽が、彼女が一步一步歩む道を作り出していた。ガベッタの奏でる高音域は念入りで、完全に正確にチューニングされていた。

同じ家の別の静かな部屋へと歩いていくように、シューマンの音楽は途切れなしに緩徐楽章に移行するが、ガベッタは楽章同士のつながりがあることをしっかりと示し、NHK交響楽団の首席チェロ奏者藤森亮一との二重奏は、繊細でもあり、理想的なバランスを保つてくれた。

最終楽章では、シューマンの革新的な書法に対する、ガベッタの大胆なアプローチが見られた。シューマン自身によるカデンツァはとりわけ力強く演奏され、やがて確信に満ちた終結を迎えた。ガベッタはヴァスクスの《チェロのための本》の第一曲をアンコールとして演奏し、この流れを完結させた。ガベッタは2016年のプロムスの第一夜でこの曲を披露しているが、今回もその歌声を含めて驚くべき演奏であった。

後半は、ゆっくりと燃え上がるようなラフマニノフが演奏された。NHK交響楽団は《交響曲第2番》の第1楽章で本領を発揮していた。冒頭のムーディーな低弦が少しばかり引き気味に演奏されていたら、ヤルヴィはこの音楽をもっと十分に展開させることができただろう。テンポが急速になると、太陽が屋外から照らしているような広々としたテクスチャとなり、一度その垣間見ると、それを手放すことはできないような輝きだった。スケルツォは熱狂的なテンポで演奏され、ぎりぎりのところでその煌めきを見せていた。

ヤルヴィは有名なアンダンテ楽章を、華やかなテクスチャに浸りつつ、しかし沈溺しすぎないように的確に指揮していた。それによって、松本健司(原文は伊藤圭)によるクラリネットは、その最良の舞台の上で心を打つソロを奏でることができた。もっとも、ヤルヴィによる解釈が真の形で我々に伝わったのは、最終楽章の狂騒だった。オーケストラは、音楽が楽器セクションの間を興奮しつつ行き来し、パーカッションが素晴らしい音にきらびやかさをもたらすと、もう一つギアが上がったように思えた。

エストニアの独立記念日だったこの日、ロンドンで日本のオーケストラとともにこの日を祝えることに言及していたヤルヴィは、ヘイノ・エツレルの《弦楽合奏のための5つの小品》から太陽の明るさに満ちた〈祖国の調べ〉を演奏し、それを通して我々に夏の風景を垣間見させてくれた。この楽曲は春の訪れを感じ、クラシック音楽の潜在的な広がり語ってくれた演奏会の最後に、実に適した楽曲だった。エストニア人の指揮でアルゼンチン人のチェリストと共演した日本のオーケストラ。好きにならないことがあるだろうか？